

2 金田村国民学校 戦中、戦後の教育 ・ 地域 < その3 >

(6) 教育勅語、儀式

＊ <1・2年生>

学校の儀式の思い出はあまりない。紅白まんじゅうをもらったこともある。「朕惟うに」は聞き覚えがある。

＊ <3・4年生>

天長節などの儀式の時には「教育勅語」が述べられた。講堂の壇上の高い所に御真影があり、お宮さんの中に収められていた。儀式は講堂であり、君が代を唄い、初めは、皇居遥拝から。方向を決め皆で最敬礼した。何でもかんでも天皇陛下の世の中だった。

毎朝の朝礼の時、校長が勅語を読む。その後、校長からの「訓辞」で朝礼は終わった。4～6年生は勅語を御名御璽まで全部覚えさせられた。覚えなければ、帰らせてくれなかった。

紀元節等の儀式には日の丸を挙げ、子供たちは、今みたいにガヤガヤ騒がしくしていない。話をしないで、みんな緊張して式に臨んでいた。

元旦や、卒業式などの学校の行事には、日の丸を掲げて、校長先生が教育勅語を読む。生徒は直立して聞いた。それが実に長く感じられた。勅語は暗記させられ、できないと立たされた。

＊ <5・6年生>

焼ける前の学校の儀式の時、講堂に集まり式典があった。教頭先生が教育勅語を奉り校長先生の前に運ぶ。読み進められて式典が始まった。式毎に歌が決まっていた式歌をうたった。うやうやしく進められ、生徒たちは静かに参列していた。

学校が再建された後は、全校生が集まる講堂がなかったので、教室の仕切り板を取り外し、大広間を作り式が行われた。

教育勅語は修身の科目の中で教わり、朝、朗読させられた。

学校には独立した奉安殿はなかった。その代り、講堂の正面に御真影がしまわれていた。

* <卒業生>

金田小学校には奉安殿はなく、校長室に御真影・教育勅語が置かれていた。

(7) 校舎の再建

* <1・2年生>

遠足で学校から大磯へ畑の中を歩いて出かけたことがあった。高麗山からの帰り、材木を積み運んでいる牛車に出くわした。先生からこの材木が学校の校舎になることを教わった。校舎は皆の手で作られていると思った。

校庭も製材所になっていたし、壁の漆喰は海藻を大釜で煮立てて造り、まさに学校は工事現場だった。

高い所の漆喰塗は、下の人が上に放り投げ、上の人が手板で受け、壁に塗りあげた。本当にタイミングよくその作業は続けられていった。今思えば、今の子どもたちは、これまでの職人業や積まれてきた作業経験に触れる機会がなくなっているように思う。もっと見せて、もっと触れさせて技術を伝承することが必要と思われる。

* <3・4年生>

学校の建築の様子は、熊野神社からの帰り道、見ながら通った。合掌造りのような屋根の骨組みが架けられていたことを思い出す。

親に聞いた話だが、必要資材の調達は現金ではなく、コメで取引したこともある。寺田縄はコメ所なので秦野でコメと引き換えに、原木を手に入れ、校庭の南側に製材所を作り角材や板に加工した。村の大工や農業会の勤め人たちが担当した。中心は大工の寿さん、田中サブちゃんだった。

校舎の図面は、村会議員たちが平塚で焼け残った学校を視察し作成した。

校内の学年ごとの仕切りは、壁ではなく三尺の渋板を並べた「はめ込み式」だった。

金田の校舎再建は、平塚、中郡内では比較的早く完成している。町場の学校は十年近く後だったと記憶している。

* <5・6年生>

22年の落成式の日、演芸会があった。式典が終わってからだったか、金田の人の紹介で、当時一流の芸能人が来た。

(8) 川崎からの集団疎開生

* <1・2年生>

集団疎開生が金田にも来ていた。今の駐在の西に避病院があり、そこを使っていたようだ。お風呂がなく、生徒は付近の農家に貰い湯に来ていた。自宅に集団疎開の女の子1名を預かっていた。

* <3・4年生>

集団疎開生は避病院を生活の場にしていた。戦後避病院を移動させ役場と駐在として使った。

川崎の日吉小学校から、集団疎開の生徒が金田にやってきた。福田寺の地藏堂に宿泊した。風呂がないので、家の風呂に入りに来た。サツマイモやミカンを食べさせたり、昔の話をしたりした。あまり風呂に入っていないのでシラミを置いて帰ったこともある。

親元を離れての生活は、可哀そうだった。村の催しがある時には呼び共に過ごした。

私的なことなのだが、職を持ち川崎勤務の時、かつての疎開生の級長さんを訪ねたことがある。当人は、他の町で勤務していたが、後になって、丁重な礼状が届いた。

* <5・6年生>

集団疎開生は福田寺に来ていたと思う。金田の学校の在校生との交流がなかったので覚えていないのかな。

縁故疎開生は相当数来ていた。クラスに5・6人くらいいた。子どもだけが親戚を頼ってきて、戦後は戻っていった子どもがいた。世帯で越してきて実家の物置の隅を住まいとしていた人もいた。

川崎の日吉国民学校の児童が集団疎開で金田に来て、お寺さんに泊まっていた。家に泊めたこともあり、ご飯を食べさせ、お風呂にも入れた。川崎から来た先生が、子供たちの面倒を見ていた。金田小で一緒に勉強することはなかった。麦刈りなど農家の仕事も手伝ってくれた。

(9) 農作業：報国農場

* <1・2年生>

サツマイモと麦を植えていた。収穫されたイモはリヤカーで運んだ。

* <3・4年生>

目川の河原の報国農場は、土地は肥え作物がよくできた。大水になると流されてしまった。サツマイモの沖縄百号はあまりうまくなく、スライスして切り干し。粉にしてイモ団子や豚の餌にした。太白はイモが長く、掘るとき鍬で切ってしまった。中は白く蒸かしたては皮をむきやすかった。収穫物はリヤカーに積み、水神橋から走り下った。

終戦後、食べ物がないので、金目川の河川敷の飯島、寺田縄から入野にかけてサツマイモを植えた。

化学肥料はないので、学校の下肥を天秤で運び畑にまいた。家から桶をかついで持ち寄り、一荷と云って、天秤棒の両端を一人ずつで担ぎ、中央に桶一つ提げた。重たいので学校から畑まで行くのに何度か休み休み行った。一回で行けた人はほとんどいなかった。

学校の農園で栽培したサツマイモの「沖縄百号」は、うまくなく、食用より家畜の飼料にしたことが多かったようだ。「太白」は甘くうまかった。

サツマイモはスライスする機械で薄く輪切りにして、乾燥させてイモの粉を作り、団子にしてふかす。黒く堅い団子になった。イモ団子と呼んでいた。あまりうまくない。色黒の子のあだ名を「イモ団子」と付けてからかった。今だといじめになるかな。

* <5・6年生>

金目川の河川敷の小高くなったところに「沖縄百号」を栽培し、食用にし、供出もした。

水神橋から霞橋にかけて作られた畑だった。金目川の土手の内側の小高くなっている所に、川から砂を運び込んだりして土づくりもやった。土手の内側なので、雨で川の水が増すと畑の土が流されることもあった。その時は、生徒たちが修復に向かった。

サツマイモは「沖縄百号」という品種で、大きなイモが収穫できた。味はあまり美味くはなかった。「太白」というイモは美味かった。

* <卒業生>

金目川の河原にサツマイモを作った。品種は「沖縄」との名がついていた。形は大きかったがまずかった。

小学校の便をくみ取り、「さしかつぎ」と云って、二人で天秤の両端を担ぎ、一杯分の肥桶を下げて運んだ。桶は家から持ち寄った。運ぶ分量は、重くて、ちいっと（少量）では、先生が見ているから駄目だった。頑張って、学校から金目川まで重たい桶を運んだ。

畑には高い畝を盛り、イモの苗は釣り針状に湾曲を作って植えた。収穫量は多かった。収穫のイモは、供出し・・・、残りはドウナツタカ・・・わからない。取り締まった闇米も警察が食べたとの噂もあり。戦後の日本には権力の横行があったようだ。

■ バスは「木炭自動車」だった。秦野の台町の坂が登れず、完全に停車してしまう。乗客は降りてバスを押し上げた。そのようなことは、今では、とても許されないだろう。